

最近話題の「不活化ポリオワクチン」とは？

最近 NHK ニュースなどで、現在行われている「ポリオ生ワクチン」の弊害と「不活化ポリオワクチン」の話題があったようです。何人かの母親からも私に問い合わせがありました。

ポリオは別名「小児まひ」と言われ、ポリオウイルスにより神経が侵されて筋肉（特に下肢）が麻痺する伝染病です。南アジアやアフリカの低開発国では現在も流行がありますが、日本では過去 20 年間以上ポリオにかかった人はいません。

現在、日本ではスポイトで口に入れる「経口生ワクチン」で予防しています。接種後 1 カ月くらいはポリオウイルスが便から排泄されると言われています。そのためごく稀ですが、飲んだ本人や保護者などに「小児まひ」を発症する事があるのです。（100 万

接種につき 2~3 人の割合）日本では平成 1 年から 19 年の 19 年間で「生ワクチン」によるポリオ発生は 80 人です。

概算ですが沖縄県の出生が年間 15,000 人とすると年 2 回接種として年間 30,000 接種で、100 万接種÷3 万接種=33 年となり、沖縄県では約 30 年に 2~3 人が副作用として「小児まひ」が発症する計算になります。

この数字を多いか、少ないと感じるかは個人差があると思います。

現実にはポリオが流行していない欧米諸国では、ワクチンによる「小児まひ」が絶対起こらない「不活化ポリオワクチン」が主流となっています。先進国で未だに「生ワクチン」を使用しているのは日本だけです。表にして「生ワクチン」と「不活化ワクチン」の違いを比較してみましょう。

	生ワクチン（経口）	不活化ワクチン（注射）
世界の使用状況	ポリオの流行している国・地域で使用	ポリオの流行していない国・地域で使用
日本の状況	定期接種（集団接種、無料）	国内では承認されておらず、外国から個人輸入している医療機関（個別接種、有料）
メリット	注射でない。値段が安い	ワクチンによる「小児まひ」が起こらない
デメリット	稀に（100 万回に 2~3 人）ワクチンによる「小児まひ」が起こる	注射による接種が必要。値段が高い（1 回 6,000 円程）4 回必要。健康被害の公的救済がない

欧米では「不活化ポリオワクチン」と DPT、B 型肝炎、インフルエンザ菌（ヒブ）との混合ワクチンも使用されており、日本でも DPT との混合ワクチンが開発中と言われて

います。一日も早く「ポリオ生ワクチン」から公費負担の「不活化ポリオワクチン」になるように期待しています。

（たまなは）